

平成 22 年 5 月 26 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20791791
 研究課題名（和文）山村過疎地に住む中学生の“親元離れて元気に生きるプログラム”の考案
 研究課題名（英文）A Conception of a Program for Junior High School Students in the
 Countryside to Live a Autonomous Life on One's Own.
 研究代表者
 西頭 知子（NISHITO TOMOKO）
 大阪府立大学・看護学部・助教
 研究者番号：90445049

研究成果の概要（和文）：

過疎地に住み、高校進学に際して実家を離れることを余儀なくされている中学生が自己を管理し健康を維持していけるための性教育プログラムの考案への示唆を得ることを目的としたアンケート調査を実施した。結果より得られた学生の特徴と教員の現状および地域の特性から、教員と家族、地域が連携して実施するプログラムに検討の価値があることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to gain a suggestion about a conception of a program for junior high school students whose indispensable to live a autonomous life on one's own. I carried out unsigned questionnaire to junior high school students and teachers in the countryside. The result shows the present condition and characteristics of students and teachers. Those suggested the merit of sex education that practice in cooperation with teacher, family, and community.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野： 医歯薬学

科研費の分科・細目： 看護学・地域・老年看護学

キーワード： セクシュアリティ教育、思春期、中学生の性意識

1. 研究開始当初の背景

今日、私たちの社会では、インターネットや携帯電話の普及により性に関する情報が無秩序に氾濫しており、子どもたちにも容易に手の届く状況にある。そのような中、年々性行動は低年齢化しており、それに伴う若者の STI 罹患や人工妊娠中絶の増加が問題となっている。大学生を対象とした調査でも男女とも約 60% が性交経験を有するが、避妊に関する知識は曖昧で、正確な避妊行動はとられておらず、加えて HIV/エイズや STI に対する

予防意識も低いことが指摘されている。

一方、中学生の保護者対象の調査では、約半数が自分の子どもは性についての的確な行動を取れない、あるいは取れるかどうかかわからないと答えており、学校での性教育の内容についても知らないという現状があった。加えて、教育現場では、7 割の教員が性教育に対して苦手意識を持っていることが報告されており、家庭や学校などの本来子どもたちが性に関する正しい知識を得られるはずの生活や教育の場がその役割において十分に

機能していないことが窺われた。

このような背景を受け、平成 12 年 2 月に設定された「健やか親子 21」では、21 世紀にさらに深刻化することが予測される新たな課題の一つとして“思春期の保健対策の強化と健康教育の推進”が提示された。「思春期における性行動の活発化・低年齢化による人工妊娠中絶や性感染症の増加、薬物乱用、喫煙・飲酒、過剰なダイエットの増加等の傾向が見られており、これらの問題行動が思春期の男女の健康をむしろ悪化している」との問題意識のもとに、「改善に向けての努力を強化していく必要があり、21 世紀に取り組むべき主要な課題として、集中的に取り組まねばならない」と提言されている。

思春期における問題行動は、本人の現在の問題に留まらず、生涯にわたる健康障害や、時には次世代への悪影響も及ぼしかねない問題である（厚生労働省、2000）。また、この思春期の年月の間に保健に関連した行動パターンと活動が大いに形成される（WHO 専門委員会報告、1979）とも言われており、思春期の保健対策の強化と健康対策の推進は、子どもたちが将来、正確な情報のもとに自分で判断し、自ら健康管理できるため、更には将来親となる子どもたちに生命の尊さや自分たちが子育ての当事者になることの自覚を促すためにも、重要な役割を担っていると言える。

研究対象地域では、地域内にある 15 校の公立中学校の内 14 校が過疎認定地域にあり、多くの生徒が中学校を卒業した後、高校進学のために親元を離れることを余儀なくされている。このような子どもたちに対して、氾濫する性の情報に惑わされず、自己の心身を知り、管理し、健康を維持していけることを目的とした教育を行うことは、子どもたちの安らかな発達を促進し、その後の人生を元気に生きていくことにつながっていくと考える。対象地域において、思春期の子どもたちの性行動の活発化、低年齢化の実態があることは、医療・教育関係者にも認識されているがサーベイランスされておらず、正確な実態は把握されていない。

本研究は、対象地域における中学生の性行動・性意識に関する実態調査、及び教職者のセクシュアルヘルス教育に対する意識および実施状況を調査することで、状況を正確に把握し、より効果的な性教育プログラムの開発への示唆を得るものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中学生の性行動・性意識の現状および教員の性教育に対する考え、性教育の実施状況を明らかにするとともに、関連する因子を探索することで、子どもたちの行動変容につながるような性教育を検討す

るための指標を得ることである。

3. 研究の方法

山間過疎地に住む思春期の子どもたちの性行動・性意識の実態および教員の性教育に対する意識と実施状況について明らかにすることを目的として質問紙調査を実施した。

1) 対象

対象は、A 県 B 保健所管轄地域内の過疎認定地域である 10 町村において、学校長より研究への理解が得られた公立中学校に通う生徒と教員で、質問紙調査に同意した者とした。

2) 研究デザイン

探索的記述研究

3) 調査期間

平成 21 年 6 月～9 月

4) データ収集法

無記名自記式質問紙調査法

5) 調査内容

学生：①対象の属性、②他者とのコミュニケーション状況、③性行動、④今までに受けた性教育、⑤性に関して知りたいことと情報源等。先行研究と青少年の性行動全国調査のアンケート内容等を参考に選択法および自由記述で調査した。

教員：①対象の属性、②教員の年齢区分、③性教育の現状、④望ましいと考える性教育等。学生の実態と教員の認識との比較および考察することを目的として、内容を設定した。選択法および自由記述で調査した。

6) 分析方法

数値化したデータは量的分析を行い、記述的データは類似項でカテゴリー化を行う。

4. 研究成果

<結果・考察 1；学生>

① 対象の属性

1 年生 28 名、2 年生 41 名、3 年生 116 名、計 240 名に配布し、回収率は 173 名；72.1% (女子 92 名；53.2%，男子 79 名；45.7%) であった。

② 他者とのコミュニケーション状況

友人とのコミュニケーション

男女とも 9 割以上の学生がよく話をする同性の友人をもっており、よく話をする異性の友人も 8 割以上の学生がもっていると答えた。他者との関係を形成するコミュニケーション能力が低下していることが、子どもたちの性行動が活発化していることの一つの要因とも指摘されているが、対象となった学生たちは社会的適応状態が良好であることが窺える結果であった。

家族とのコミュニケーション

ほぼ毎日父親と会話すると答えた学生が全体の6割強、同様に母親と会話すると答えた学生は9割弱であり、学生たちは家族に適応している様子が示唆された。しかし、家族で性に関する会話をしている学生は2割程度に留まる結果であった。

③「性行動」

全学生の4割強、女子学生では半数以上が好きな人がいると答え、デートの経験を持つ学生は全体の約2割であった。対象学生たちの性行動の現状はほぼ全国平均と並ぶ結果であった。

④「今までに受けた性教育」

今までに受けた性教育について

今までに学校で性教育を受けたことがあると答えた学生は全体の78.6%(男子:78.5%,女子:80.4%)であった。内容としては、「男女のからだの違い、仕組み」(28.4%)、「妊娠の仕組み」(14.9%)、「性感染症・HIV」(11.3%)、等であり、中学校学習指導要領に示されている内容とほぼ対応していた。性教育の内容が役に立つと感じたかとの質問には、「わからない」(30.1%)と答えたものが最も多く、「非常に役に立つ、役に立つ」との評価は3割弱(28.9%)、「全然役に立たない」2割弱(18.5%)であった。全国規模で実施された先行調査においても、中学生では、性教育が役に立つかどうか「わからない」と保留する評価が4割を占めており、学校段階が上がるごとに評価を保留する学生が減少することが示されている。性行動がまだ活発でない中学生においては、学習内容が役に立つと感じる実体験が少ないことから、評価を保留する学生が多くなったことが考えられる。

性に関して知りたいことと情報源

性について知りたいことは、「特にない」が全体の24.2%で最も多く、次いで「恋愛」(14.8%)、「男女のこころの違い」「セックスについて」(8.4%)、の順で回答が得られた。男女の傾向に大きな違いはなかったが、特徴として女子では「男女の心の違い」「性の不安や悩みの相談の仕方」と答えた者が多く、「特に知りたいことはない」と答えた者は、男子が多かった。性に関する知識の情報源は、「友人」が全体の3割弱(27.3%)で最も多く、次いで「学校の授業や教科書」(13.2%)、「コミックス/雑誌」(11.4%)、「学校の先生」「特にない」(10.3%)であった。男女別の結果においても最も回答が多かったのは「友人」で共通していた(男子:29.5%,女子:25.1%)が、次いで回答は、男子は“先輩”13.3%,女子は“コ

ミックス/雑誌”17.1%であった。

<結果・考察2;教員>

① 対象の属性

6校、計47名に配布し、回収率は45名;95.7%であった。

② 教員の年齢区分

40代、50代の占める割合が多く、教員経験年数は、“30年以上”35.6%、“5年未満”22.2%、“20年以上25年未満”13.3%であった。

③ 性教育の現状

学校

学校で実施されている性教育の形態は、「学年単位・男女合同」が最も多く(30.0%)、次いで「クラス単位・男女合同」(20.0%)であった。学年単位、クラス単位、男女合同、男女別等、内容に合った方法で実施している学校もある一方、「学校全体が計画的に“性教育”としてはしていない」「特に行っていない」等、性教育の時間を設けていない学校もあり、性教育の実施において、教員の認識に差があることが窺えた。

教員

教員の66.7%が性教育実施の経験を持っていた。20代の教員の実施経験率は5割、40~50代の教員では7割強であった。実施内容としては、「男女のからだの違い・仕組み」(14.6%)、「男女の心の違い」(13.9%)、「妊娠のしくみ」(10.8%)等で、中学校学習指導要領に準ずるものであった。性教育を実施したことがあると答えた教員の6割強が性教育を行う時に困難感や戸惑い、サポートの必要性を感じると答えており、年齢や経験年数に関わらず、性教育の実施においては困難感や戸惑いを感じている教員が多いことが窺えた。

④ 望ましいと考える性教育

望ましいと考える実施者としては「養護教諭」との答えが最も多く(27.8%)、次いで「クラス担任」(18.6%)、「家庭」(15.5%)であった(複数回答)。養護教諭が望ましいとした理由として「専門である」「中途半端な考えで指導しては、誤解を生むかも知れない(ので養護教諭が適当)」「全体を把握でき最新の情報や考え方にも精通している」等が挙げられた。クラス担任と養護教諭、医療職等の専門家との協力が望ましいとする意見や「保護者や家庭と連携して取り組む事が大事」「家庭や学校でさまざまな人がするべき」等周囲の大人全員で担うべきとの意見も多かった。現在中学校で実施されている性教育については半数以上(55.6%)が「充分だと思わない」と答えた。理由としては、「十分な内容を指導

できるだけ時間数の確保ができない」等の時間的な制約に関する事や、「もう少し丁寧に教えるためにしっかり研修しないといけない」「恥ずかしがって教員が何も語らない」等の教員のスキルに関する事が挙げられた。また、「系統的な指導が行われていない」「(各学年で)積み重ねた指導ができていない」「どのような程度の教育が望ましいか明確になっていない」等、継続して学校全体で取り組んでいけるような計画がなく、教員たちの共通認識のもと実施されていない現状が窺えた。性教育を通して伝えたい、または伝えるべきだと考える内容は、「人を尊重する心」(37.8%)、「性に関する正しい情報」(33.7%)、「恋愛関係における交際の仕方」(14.3%)であった。教員は、性に関する正しい知識を伝えると同時に、相手を尊重した関係が築けるようなコミュニケーションスキルを身に付けることが必要であると考えていることが窺われた。

<まとめ>

対象学生の特徴として、友人や家族と良好な関係を築いていることが窺われ、とりわけ父母と会話をもつ頻度が高かったことは特記すべき結果であった。学生たちの性行動はほぼ全国平均並みであり、友人や先輩、コミックスが身近な情報源であるという特徴が窺われた。学校の授業や教科書は、避妊に対する態度・行動に効果がある一方、友人から得た情報は適切な性知識の増加には関わっていないことが先行研究でも指摘されており、教育により正確な知識を提供する事の必要性が改めて確認された。

教員は、6割以上が性教育の実施において困難感や戸惑いを感じていることが明らかになった。その背景には、性教育の実施に関する系統だった指導計画がなく、教員間の共通認識が不足している現状があることが示唆された。また、半数以上の教員が現在実施されている性教育に対して十分ではないと評価しており、その理由には時間的制約、教員の知識やスキルの不足等が挙げられた。性教育の望ましい実施者には養護教諭が1番に挙げられたが、クラス担任や家庭、専門職種が連携して性教育を担っていくべきとの意見も多く聞かれた。

対象地域は子どもの数が少なく、ほとんどの子どもたちが幼いころより一緒に成長し、お互いの家族のことを良く知りあっているという環境をもつ。このような地域の特徴は、教員と家族をはじめ子どもを取り巻く大人たちが連携するための素地となり得るものである。また、本調査におい

て、学生の家庭への適応状態が良好であることが示唆される結果が得られたことや教員が性教育の実施において家庭や他職種との連携を望ましいと考えていることが明らかとなった。これらのことより対象地域における性教育プログラムとして、教員と家族、地域など周囲の大人たちが連携して実施できるプログラムを検討する価値があることが示唆された。今後引き続き、この調査より得られた因子の関連性等を検討し、効果的な性教育プログラムの考案につなげていくものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西頭 知子 (NISHITO TOMOKO)
大阪府立大学・看護学部・助教
研究者番号：90445049

(2) 研究分担者

なし
研究者番号：

(3) 連携研究者

なし
研究者番号：